

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成17年5月5日発行(毎月5日1回発行)
第45巻5月号(通巻550号)

風土



5

1407

水温む

神蔵

器

桂郎の一跳び川も水温む

桃咲いて画布より出でし麗子像

燕来る声なきこゑの無言館

能「頼政」観て坂下る朧かな

一匙のロイヤルゼリー涅槃西風

冬眠の蛇を目覚めます雷とどく

唐招提寺

蛇出づや鑑真の留守長びきて

椿灯す孟宗林の入口に

一幡のあそび足らざる龍の玉

初蝶の先に水音滑川

西行忌真赤な夕日海に落つ

たんぽぽや青空に書く遺言書



竹間集

同人作品



建立奉加

柴田 由乃

忌の席に花の下伏し乞ひ願ふ
咲き満つる奥千本の花の色
朝寝してすみからすみまで明るかり
放牛の呼び込み春の二日月
ひと風呂を新空港に海は春
初雷に空を失ふ雀どち
本堂の建立奉加姥彼岸

春 雪

高橋 邦夫

なんとなく雷門へ寒の明け
春浅き妻が病衣の花模様
ふところに畳む処方や梅三分
声高にくらす坐職の鬼やらひ
失恋の猫なり何か着せてやれ
春雪やしづかに昇りゆく樹液
自画像の顔冴え返る無言館

早 春

代田 青鳥

大山千枚田
早春の角とれてをり千枚田
海苔あぶる父の職人氣質かな
水底に村を眠らせ草萌ゆる
主なきままの窯場や下萌ゆる
五浦海岸
早春の六角堂の鬼瓦
小波に影も揺れぬ海苔小舟
ストレスといふもののけや二月尽

鳥帰る

— 浜 福恵 —

ど
の
道
も
海
へ
通
へ
り
藪
椿

流
感
の
只
中
に
あ
り
黄
砂
降
る

霾
天
や
残
雪
を
被
る
若
狭
富
士

竹
秋
の
色
深
む
な
り
道
祖
神

斑
雪
野
を
抜
け
若^{じやくしゆう}州^{しゆう}
の
女
関

蛸
舟
の
あ
が
り
し
浜
や
春
支
度

放
哉
の
つ
ぶ
や
き
に
似
て
春
の
雪

水
光
る
比
丘
尼
の
道
の
椿
か
な

点
々
と
紅
や
磯^そ
馴^な
れ
の
藪
椿

枝
潜
り
来
た
る
は
鴨
か
椿
吸
ふ

虫出しの雷に鳴くなり犬老いて
青戸江の奥なる鴨の引き支度
送電線の真下たばしる雪解水
一国に一城若狭の鱒漁
鱒にはいさざ道あり鳶鷗
鷹化して鳩に流木嵩をなす
蜷にそれぞれの筋あり水温む
麩饅頭に若狭の春を肯へり
近江への九里半峠雪解急
鳥帰る村に流離の仏たち

山河集

同人作品



神蔵
器選

三極の開きそめたるあをさかな
さへづりや樹の一本となりて聴く
木道に先をゆづるや露の臺
剪定師亡母の話をしてゆきぬ

浅田 光代

夫は

少年のまなざしとなる蝌蚪生れて
秣食ふ今丸腰の木出馬
林中を鳥の飛べる二月尽
啓蟄や亡き子にも来る誕生日
春一番口を燦燦と磨き上ぐ
春一番櫻は丈をうべなひて

工藤ミネ子

大寒や携帯酸素凍りつく
豆撒の声の小さきを咎めらる
そろばんをはじく音する豆の花

保田英太郎

春立つや母校に残る丸き屋根
兩岸はだんらん家族水草生ふ

寒明けるホテルに草の盆栽展

平田紀美子

鎌倉は梅の日和の寺続き

縁切寺の菫は秘色の色をして

梅ひらく身体枕研究所

採りにゆく子安の里の露の臺

椿餅に添へて名入りの小風呂敷

島田 和子

春の雪沈香炷いて籠りけり

送迎バスより園児降り来る豆の花

春立つや返信用の葉書出す

永観堂の見返り阿弥陀春隣

◇特別作品◇

牡丹の芽

布施まさ子

稜線に霧立ち上る春浅し

伊豆伊東の春路上に干して烏賊の口

まだ固きさくらの下や句碑除幕

器先生句碑建立

春の海へ「海の男」の句碑の立つ

わだつみの神の御前や風光る

梅真小田原白常盤木門をくぐりけり

東風吹くや天守に探す一夜城

残りゐる南曲輪や草萌ゆる

馬酔木咲く西さい海かい子こ小路こうじ塀長き
囀りの中や白秋童謡碑
梅深大寺ひらく「紅白梅図」観るごとく
きさらぎの空へ無患子実を鳴らす
みたらしやきのふの雪を手てに掬くふ
赤松の姿ととのふしづり雪
うすらひや多摩に赤駒藁の馬
牡丹雪椿の紅をとらへけり
春の雪切支丹灯笼とうとうの上に
多聞院坂くれなる散らす藪椿
山茱萸の空の隙間の青さかな
ほぐれむと白王獅子の牡丹の芽

風土集



神蔵器選

花篋とて一枝の紅椿 川崎 内藤 静

笛鳴を墓の蕪村に相伴す

実万両座禪中なる札を下げ

冴返る黒の社殿の鳥衾

大津絵の鬼なら飼ふよ鬼やらひ

干支梵天金色緋色押し立てり

梵天の飾り外してより荒ぶ

雪こんこん昼かまくらの蒼深む

かまくらに上弦の月母を呼ぶ

千鳥縫ひしてかまくらを覗きゆく

百号の画布担ぎ出す三日かな

寸計る金堂礎 石片時雨

一枚の今日の空入れ冬の川

啓蟄や大歳時記の案内来る

吹越や税の区切る天の紺

横手 森屋 慶基

藤枝 間島あきら

身を清めるため寒林に入りにけり 東京 中嶋 陽子

友だちの数の菓子皿春立ちぬ

耳たぶにありし母性や春の雪

雁帰る小学校に馬頭琴

全校で回す長縄二月かな

表具屋へ田原町で下車日脚伸ぶ

クロツカス憲法条文に七・五調

節分会鬼問答に加はりぬ

三月の新聞小説新しく

搬出の額の地階へ地虫出づ

小鳥翔つ二月の空のうす湿り

竹林に雨の音沁む露の臺

畑打つや死ぬまで同じ山仰ぎ

風いまだ尖りてをりぬ梅の花

啓蟄や白紙いちまい鶴となり

川崎 仙田 孝子

岡山 高村 令子